

詩集

ムウサたちの

頌歌

ほめうた

正道

SEIDOU

目次

ムウサたちの頌歌	
はじめに	3
目次	4
クレイオへの感謝	
緒言・歴史の女神へ	7
詩歌女神を讃える歌	9
最愛	11
裂傷	11
その寒き日に	12
能動態	14
臆し	15
裸婦	15
エラトへの感謝	
緒言・恋歌の女神へ	17
生と死	17
精神の変容	18
鐘	18
哀歌	19
創造	20

二重協奏曲	20
泥の情炎	22
痴れ	23
疑問	24
言葉と詩	24
メルポーメネ	
緒言・悲劇の女神へ	26
無題の二十の詩 I ～ V	26
無題の二十の詩 VI ～ X	29
無題の二十の詩 XI ～ XV	31
無題の二十の詩 XVI ～ XX	33
タレイアへの感謝	
緒言・喜劇の女神へ	37
アマデウス	39
ポリュムニアへの感謝	
緒言・讃歌の女神へ	43
静穏	45
足下の赤い星々	45
摂理	46
おわりに	47

ムウサたちの頌歌

はじめに

ようやく「ヘルメティック・トリニティ」の第一稿が完成しました。すなわち『ネチェリケト』『色彩の寓意』『ヘルマプロディトス』からなる三部作の第一稿がです。そこまで行き着きまでに三か月近くかかったでしょうか。

あとは一作ごとに最後の書き直し（＝最終稿の完成）を行い、一作ごとに配信を済ませれば、それでミッシェン・コンプリートです。ですから、ヘルメティック・トリニティの最初の作品となる『ネチェリケト・聖なる身体』を皆さんがご覧になるのも、そう遠い話ではありません。

とはいえ『娘へのラブレター』と、その『ネチェリケト』との間隙が長くなると感じるのは、おそらく私だけではないでしょう。

そこで、編集の手間が少なくて済む「詩集」を『娘へのラブレター』に続き、ここで、もういちど配信したいと思います。

その詩集のタイトルは『ムウサたちの頌歌（ほめうた）』。私が、二十代前半のころに書いた作品を集めた詩集です。『娘へのラブレター』のなかに、

私もまたかつては、

かつてさすらいの時代には、

この心、

たしかに愛と別れの狭間に、

喜びと悲しみの狭間にありました。

そして、その時代には、

詩心はとめどなく私の中から迸り、

筆は楽々と、

どこまでも、どこまでも、

詩となるべき文字を、

書き連ねていきました。

という一節がありますが、その「とめどなく、楽々と書き連ねていった詩」こそが、この『ムウサたちの頌歌』に収録された作品だと思っていただいて結構です。

と同時に、それらの詩のなかには、第四福音書『太陽を着た女』で、挿入的に用いたものもあります（八作品）。

ただし、ここでは韻文であったはずの詩を、散文の形式に落とし込んでしまっています。そのため本来作品に備わっていたはずの「詩情」の幾分か（あるいは大部分）が、朝霧のように散逸してしまいま

した。

その散逸した詩情を復元するためにも、この『ムウサたちの頌歌』の韻文による配信は、作品たちにとって、まことに有益な処置となるでしょう。

それは換言すれば、第四福音書で用いられた詩たちの「オリジナル状態」の回復でもあります。

とはいえ、さすがに二十代前半の作品です。色々な面で、未熟な生硬さは否めません。正直、私としては見られて恥ずかしい部分もあります。ですが、消せない過去の記録ということで、大きな修正はしないでアップすることにしました。

なお、この詩集に収められた詩は、一行ごとの文字数が多いという特徴を持っています。ですから——もちろん出来ればですが——読者の皆様には、パソコン等の「大きな画面」で読んでいただけるとありがたいです。

目次

はじめに

クレイオへの感謝

（歴史の女神へ）

エラトへの感謝

（恋歌の女神へ）

メルポーメネ

（悲劇の女神へ）

タレイアへの感謝

（喜劇の女神へ）

ポリュムニアへの感謝

（讃歌の女神へ）

お
わ
り
に

クレイオへの感謝

緒言・歴史の女神へ

ギリシア神話における学芸の女神、ムウサ（ミューズ）たちは九人姉妹だとされており、九人それぞれが、天文、叙事詩、舞蹈などを統べ、かつ司る役割を担っています。

それゆえ古今にわたってムウサの誉れを讃えた芸術家は数多とおり、たとえば、やはりギリシアを愛した画家モローには、水彩で『ムウサたちの散策』という作品が存在しています。

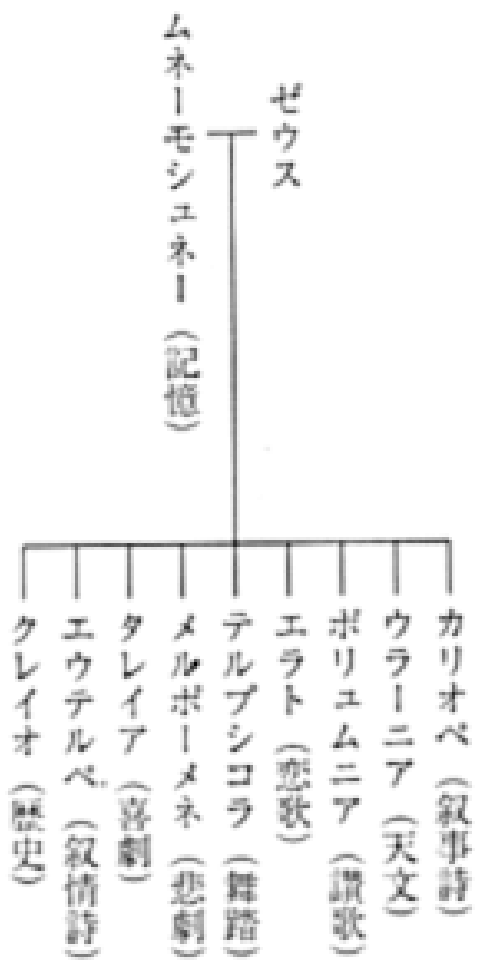
この絵の図柄は、古代ギリシアの詩人ヘシオドスが、九人のムウサを背後にして散策しているというものです（表紙で使っているのが、このモローの作品です）。

実際にそのヘシオドスの作品『神統記』『仕事と日』などを捲ってみますと、冒頭にムウサを讃える言葉を見出せます。その点では、ヘシオドスと並び称されるホメロスの作品『イリアス』『オデュッセイア』においても同様です。

こうした習慣は、ウェルギリウス（ローマ）による『アエネーイス』においても見られますが、やがて古典時代が終わりを告げると一緒に廃れてしまったようです。

少し寂しい気もします。しかし十八世紀ごろのドイツを中心に起こった新古典主義、その中心にあったゲーテの作品『ヘルマンとドロテア』に、かつての芸術の女神が、明瞭な姿を現しています。そこで私たちは、再び女神を身近に感じることができましょう。

ゆえに今もムウサは、生きた信仰対称となりえます。そして私自身、詩作にある種の神秘を見る者です。ですので、まったくに衷心から、女神を讃えることで詩を綴り始めたいと思うのです。



ムウサの系譜.png

詩歌女神を讃える歌

あの頃のあなたは、たしかに一人の少女に過ぎなかった。
私が愛した一人の少女に過ぎなかった。

そうして、私が傍を離れたときも、

あなたは一人の少女に過ぎなかったのだ。

それなのに、私の視界から消え去ったあなたの面影は、
母なるムネーモシュネー（記憶）の腕に抱かれ、

やがて偉大なるムウサ（詩歌女神）の姿へと変容していった。

事物は時過ぎて、色褪せた記憶となるのだろうか、
人を愛したことは、愛したという事実は、

時の移り変わりとともに、

抱きしめずにはいられない、美しい想い出へと、

抱きしめずにはいられない、狂おしい想い出へと、

その刹那の印象を変えていくからだ。

あの頃のあなたの若やいだ姿は、

私の中で想い出へと変わっていくうちに、

この胸に与える印象を、形象から激しい心象へとすり替えていく。

ああ、想い出の中に見出すあなたの微笑みは、

その残り香を甦らせるだけで、たったそれだけの事でさえ、

私に対して、深い切望の気持ちを生じさせずにはおかない。

私は、記憶の中に舞うあなたの腕を追わんとし、

このうえなく滑稽な歩調で足を駆るが、

あなたに触れる瞬間は永遠に訪れず、

その軌跡が、ただ詩という名の慰めだけを残す。

人は、我がうちに詩言の山があり、

私が、それを掘り起こすことをもって、

それをこそ、創作としていると思うかもしれない。

しかし真実は異なり、

しかも真実を知っているのは、この私だけだ。

私は、誰にも告げずに記憶の森に分け入り、
その木々の間を、もどかしげに逍遙しているに過ぎない。
思い出の中にあるあなたを追わんとする軌跡、
それが私の歌と呼ばれることになるのだから。

それゆえ、あなたは私の詩言の中に自分の姿を見出すだろう。
自らの面影を、作品のそこかしこで目にするに違いない。
けれども、それを「私があなたを今も胸の中で拘束している」とは、
……そうだとは思ってほしくない。

今のわたしはムウサをこそ愛しているのだ。
私に無限の靈感を与える詩歌女神をこそ愛しているのだ。
それは、ムネーモシュネーに抱かれる以前のあなたを指すのではない。

ムウサは確かにあなたの面影を、

その姿のあらゆる点において残しているだろうが、

その切なげな瞳の輝きは、

その儂い唇の虹彩と温もりは、

もはや、あなたのそれをも越えて美しく輝いているのだ。

誰にも言えずにいた寂寥と愛着が、

いつのまにか、人の心の中でのみ息づくことができる、

普遍なものとしての女性性を作り上げていたがために。

私が愛するムウサは、現実のあなたを越えて私を切望させるのだ。

彼女は私を満たし、あなたの今をも忘れさせてしまうだろう。

これが私の本心だというのか。

いいや、私は嘘をついているのではないか。

私は今でもあなたを愛している、

そう口にしたいのではないか。

私があるたを忘れることなどあり得るものか、

そう叫びたいのではないか。

この真実の想いが、あなたにとって、

あなたの今の幸福な生活に対する罪になるというのだろうか。

そんなことあるものか。

「私があるたを愛したところで、あなたに何の関わりが在ろう」

※ これは明らかにシーナのことを詠った詩である。」「内は、ゲーテの言葉。以下「最愛」と「裂傷」もシーナのことを想定している。

最愛

時はたしかに流れてゆくのだし、
私には、それを堰き止める力はない。
そのような時の中に生きる人間であるのなら、
私は、唯一あなただけを愛するなどということは、
誓って、一生の間、決して成り立たせられぬことだろう。
けれど、どんなに無常にして無情に流れる時の中にあっても、
あなた以上には、決して誰をも深く愛することは出来ないだろう。

裂傷

私は、恋と愛の違いを知らなかったから、
ただ、自分が彼女に縛りつけられる事をのみ、
恋情によって、自分の関心が彼女だけに縛られてしまう、
そのような未来と現状のみ恐れて、
卑怯にも、その傍を逃げ出した。

が、愚かにも気づいていなかった。
逃げたいと思っているものと一緒に、
心から「掴もう」と思っていたものさえも、
彼女によって与えられていたことを。

私は、存在の意味を知ろうとしていたが、

その答えは、愛を理解することによってこそ、
唯それのみによってこそ、導かれるものではなかっただろうか。
全身全霊をかけて、愛を味わい知ろうとすることによって――

恋によって縛られた鎖を、
英雄きどりで解き放ったのは良かったが、
同時に、愛によって互いを固く結んでいた血管を、
それまでも引き剥がしてしまった。

恋だけではなかった……

私は、彼女を愛してもいたのだ。

胸から愛を引き剥がしたとき、
私の皮膚からは鮮血がながれ、
その傷は、決して癒されることがなかった。

その寒き日に

その寒き日に、
寂寞という名の粉雪は、
降りては積もるといふ形容を過ぎて、
吹雪のように、我が胸を殴りつけたまう。

寒さを嫌うその胸は、
耐えるいかなる手段もないままに、
哀れ、いともたやすく凍りつき、
あれほどの熱気を帯びていたあなたの面影さえ、
あの大切な記憶もろとも、
いとも脆く崩れる。

崩れた氷結をつなぎ、
これを融かせるは、

春の陽を思わせるようなあなたの吐息と、
偽ることのない、肌の温もりばかり。
常に私の望みし瞳の誠実さえも、

この時ばかりは、

伝わる肌の温もりには敵わぬのだから、
他にどれほど熱きものがあるうとも、
そんなもの、何一つ役に立ちはせぬ、

ああ、あなたの訪なう時はまだか――

そうして焦がれる寒き日は、

その日は未だ、冬ざれの直中に。

草木萌える新生の時は、

巡る季節のもとに、いずれは訪れるのであろうが、
今は、どれほど目を開けども、

どれほど凍えた手をまさぐれども、
少しも気配も見せはせぬ。

しかれど、われ、無恥を装いても春に告ぐ。

「万物を統べる宿命の則を破ってでも、
今すぐに、只今に眼前に現れよ」と。

答えあればよし。

されど、我が胸にあなたの吐息が触れることなくば、
我が腕に、あなたの肌が抱かれることなくば、

この凍りついた胸は、
たちまちところを変え、

引きつけられるごとくして、
かの雪の女王の手に連れ去られん。

赤熱の胸なき男たちにとって、

女王たる彼女の美しさはいかばかりのものか。

深い心情を秘めぬ者の華美、

その近視的な美しさはいかばかりのものか。

彼女の魅惑に、

形相の冷たき妖艶さに心奪われたとしたら、

もはや我が胸は、
目を開けることをのみ喜び、
瞳とじるを後悔することはなくなる。
然り、目は形を知るが、
瞳は心情をこそ感じるのだから。

ゆえに春よ、あなたよ、今すぐ来たれ。
あまねく広がる形相の海中に、
わが胸がやがて埋没する前に。
さしのべる手おくれ、
もしも、瞳の開き方を忘れてしまえば、
私には、もはやあなたの心を理解できはしないのだから。

果てしぬ時の彼岸に辿りつき、
瞳と目の間に埋められた氷のかげらが、
悔いの涙とともに流れ除かれるまでは。

能動態

変わらず誰かを愛さんとする気持ち、
その思いが、自身をより高き心境に導くのなら、
ただ、ある人に愛して貰いたいがために、
自らの心境を高めんとする意欲をも、
また愛することと呼ぶべきなのではないだろうか。
愛する。ではなく、愛されたい、だとしても、
力を持ち、高まった己が人格、
それをかの人が求めてくれることによって、
ようやく彼女を「愛すること」が出来る立場に、
自分は就くことが出来るのだ、という、
無私な気持ちを僕は持っているのだから。

臆し

なんと呆れた臆し者
いとしいあの人 誰ぞの胸に
そのときやっと思むというか
わが胸かのひと求めたり
わが胸かのひと愛したり

ああ情けなや 臆し者
叶わぬ知って 認むというか
この胸かのひと求めしを
この腕はげしく求めしを
いま認むとは 知り得とは！

裸婦

その頃には、
私は、まだその中に潜む心情の美しさを、
母性の深みを認められなかったから、
豊かに膨らんだ胸や、
柔らかく流れる腰の線は追えても、
真の意味における女性は、
どうしても描くことができなかった。

※これは、専門学校におけるヌード・デッサンを想起して書いた詩である。

エラトへの感謝

緒言・恋歌の女神へ

思い出と諦め、その二つの中にしか己の恋情を認めることの出来なかった人間が、はじめて目前にある女性に対して、涼しい諦念とはかけ離れた興味を抱きはじめました。

そんなときに当然あらわれる不器用な様子を、あなたは、このエラトへの感謝の中に追うことが出来るでしょう。

人を好きになることなどないと思っていたのに、人を好きになりたくなくなかったのに、それでも好きにならずにはいられない人に出会ったのです。それだけの人に会ってしまったなら、仕方がないと諦めるしかありません。

諦めの中に平穏さを見出していた者にとって、自分の心が若者らしく揺らぐのはまさに恐怖でしたが、詩は際限なく生まれました。

そして、私にとって詩が生まれるのを見るのは幸福であったために、どんなに、情熱に翻弄される自分に嫌悪を感じても、その情熱から完全に逃れることは出来ませんでした。

私の心を巧みに操っていたのは、恋の神であるエロスであるよりは、やはり恋歌の神であるエラトなのでしょう。

しかし、清澄な古典的世界を嗜好していた自分が、いつのまにか、シュトルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）の波に吞み込まれている事実を把握したときには、さすがに我が身を滑稽に感じずにはいられませんでした。

歴史から何かを学んだつもりが、実際には、学んだ歴史を超えられず、個人の中で文学史を繰り返している自分があったからです。

※以下、本書の最後まで陽子によって生まれた詩が続くことになる。

生と死

女は生命を愛し、

そのあまりに無私なるがゆえに、

その瞳に死を浮かび上がらせる。

男は死を愛し、

その死によって、
己が生を、まさに生たらしめる。

男が女に生のみ見たとき、
そこには底なしの肉欲が生まれ、
女が無私なるものを忘れたとき、
男は世界を闇に沈める。

精神の変容

醜くも見える恋をしてはじめて、
人は自と他の区別を知る。

瞬間、人は目的を持った人間となり、
その目的に近づき、また試練を知る。

やがて試練の長きをこえて、
やがて自と他の意識を超えて、
ただ一つの流出の根源に触れたとき、
人間は、はじめて神の似姿となる。

恋は始まりであり、愛は終わりである。
愛という名の終わりは、
されど不変にして無始無終であり、
永遠にして神そのものである。

鐘

彼は、ただ鐘を叩くことでしか、

自らの心情を表すことが出来ないのだ。
醜い、唾の彼にとっては、

自らが救ったエスメラルダを見つめた時も、
再び彼女を、今度は命をかけて救い、

代わりに自らの死に臨むことになった時も、
その歓喜も慟哭も、

聖堂に響く、鐘の揺るぎない音となる。

私に出来ることも、ただ鐘を叩くことだけだ。

ならば、詩という名の鐘を、

悲しみも喜びもこめて、

ひたすら打ち続けよう。

『ノートルダム・イン・パリ』よりも私が愛する、

映画『ノートルダムのせむし男』より

哀歌

愛することは自由でも、

恋をするには資格がいると思う。

愛は、ただ彼女の幸せを望むのみだけれど、

恋は、その彼女によって、わが身に喜びが与えられることを、

それが彼女にとっても幸せなのだ、そう信じて望むから。

あの優しい人を自分のものにするつもりなら、

彼女を幸せに出来るだけの自分でなければ、

抱く恋は罪となる。

いったい幾人の人が、彼女を愛するために、

彼女の幸せを望むために、自らの恋心を殺したことだろう。

愛をもって諦めた恋によって、
作家は、悲しい物語を綴るのだろう。
画家は、青でキャンバスを塗りたくり、
哲人は、ショウペンハウアーのようになり、
詩人は、こうして哀歌を紡ぐ。

創造

欲望によって捉われ、
愛によって昇華し、
そうして遥か頂きにて触れた永久を、
無我によって為し表し、
これに驕れず、
愛される以上に人を愛す。

この至福をもって、
創造と呼ぶ。

※この「創造」は、まだルベドの悟りには至っていない、アルベディアンが書いた「創造」である。

二重協奏曲

なんという皮肉な主題！
これが、彼の最後のオーケストラ音楽となった、
ダブル・コンチェルトのしんがりを務めるというのか。
彼は自分の辿った人生を嘲弄しながら、
その孤独すぎる死を迎えようというのだろうか。

ブラームス、あなたが晩年に行き着いたのは、
そんなにも皮相な諦観でしかなかったというのですか。

しかし、音の皮肉は次第に力をひそめていき、
やがては静寂が何もかもを包んでしまう。
そして響く！ つんざく！ 痛いぐらいの弦の音！
何という激しい響き、何という若い響き。

確かに彼は、自分の人生を振りかえり、
それを皮肉な目で眺めることによって、
一人の人間の、陳腐な一生を受け容れようとはした。
しかし、その老いの諦めのなかで、
しかし、諦められない若さが楽想をつんざく！
「ちがう、私の人生は、そんなものではなかった。
少なくとも、そんなものだけではなかった。
クララ、そうではなかったでしょうか。
先生、そうではなかったでしょうか！」

その若い響きは、彼の最初のオーケストラ曲を集約し、
一瞬の中に、若さの全てを詰め込んだようにも聞こえる。
その響きが曲を中断させるように鳴りわたるとき、
私には、その短い響きが、
第一ピアノ協奏曲の全体を背負っているように思える。
シューマンの病んだ精神に対して言葉を失い、
師の妻への想いに苦しんだ時期に書かれたこの曲が、
激しさを少しも損なわずに鳴りひびくのだ。

この不意に涌いた若さに圧倒されそうになった老人は、
再び皮肉な諦観を取り戻そうとするが、
その抵抗が実を結ばぬうちに、若さは再び自己を主張する。
ブラームスも、もはや認めざるを得ない。
自分の人生が、単なる皮肉の対象にはなりえぬことを。

こぼれた若さは、皮肉な主題に活力を与え、
やがて混じり合った皮肉と情熱とが、
作曲家の晩年に、真に熟した赤銅の色彩を与える。

曲は、燃え上がる激情と老練とを重ねあわせ、
ブラームスの人生に弔辞を送るコードにいたる。
彼は、この時、本当に自分の人生を達観したのだ。

自分の人生の意義を知った黄色い顔の男は、
死という終わりを身近く迎えようとしている、
もう未来を望めぬおのれを自覚するようになり、
ついに過去と未来を超えた世界を垣間見る。
その世界の印象を別離の音楽として表し、
あの遺言とも、白鳥の歌とも聞き取れる、
澄み切ったピアノ小曲を生み出していく。
そこに若さはなく、老いもない。
しかし、それは全てを持ちうる響きとなった。

泥の情炎

もはや情熱を超えて豪熱が胸を巡る。
今では、落ち着いた理性など厭わしいばかりだ。
ただ君を讀んでいた。
僕が、それだけの存在になれば、
人間とは、どんなに偉大なものと誓むべきか。

僕は愛する。
いや、君を自由になどするものか。
僕は、君を我がものにしようとする。
なんと醜きことか。
けれど、その狭窄的な愚かしさに、
僕はこの心をくれてやりたい。
涙が溢れる。
だが何の涙なのか知ることも厭わしい。
知ろうとすることは、
冷静さの範疇に入ることだからだ。

僕は澄んだ情熱さえいらぬ。
泥の情炎で身を滅ぼすことをこそ望む。
そして、その死によって、
君を永遠に想い続けるものへと変わりたい。
君を僕のものにして、
僕の魂は、君の中に融けている。
そして、新たな魂となって生まれよう。
二度と苦しまぬために。

痴れ

今日、家から離れたとしても、所詮君に会うことはできない。
ゆえに、自ら足を動かすのは、氣だるく、
ただ物憂いばかりの選択となる。
それならば、家を離れることに何の意義があるのだろう。
こうして詩を綴ってさえいれば、内心のミューズには、
それこそ、いつまでも触れていられるというのに。
そのミューズの姿は、
君を想起させるものに満たされているというのに。

ああ、女神によって呪われよ、君を感じさせぬ全てのものよ。
私を呪え、彼女ではありえぬ者たちよ。
そうして滅ぼせ。私の骸を抱いて、彼女が涙を流すように。
彼女が苦しむ姿も、それが私のためのものならば喜びとなる。
卑しき男よ、汝の名は痴れ者！

疑問

過去よ、そこに生きていた私よ、
お前は、どうしてそんなにも冷静でいられたのだ。
どうして、遠い彼女の息吹を感じて、
その胸を焦がすことをしなかった。
どうして、会ったことがない彼女を、
夢想して苦しむことをしなかった。
お前が苦しまなかったために、
私は、自分を不実だと思わずにはいられない。
どうして、私の生の全ては、彼女へ捧げられなかったのだ。
その理由が分らない。どうしても、今の私には。

言葉と詩

君に告げようとする言葉は、
のこらず詩となってしまう。
散文は僕の言葉であり、
詩は、僕の手が届くことがない、
心の深い場所での訴えだからなのだろう。
だとしたら、
こんなにも淀みなく描かれていく詩を眺めながら、
そこに運命を感じることを、
果たして傲慢だと言えるだろうか。
運命と僕とはつながっている。
一なるものと僕とはつながっている。
手の届かない魂の深遠で、また君とも。

メルポーメネ

緒言・悲劇の女神へ

対象が「悲劇」を司る女神であるために、さすがに感謝という言葉を呑み込んでしまいました。この時期の私を支配していたのは、まさしくこの悲劇の女神であったことでしょう。

何があったのかは書きませんが、冒頭に置いた詩から、あるいは何かを察することが出来るかもしれませんが。この詩は、古代ギリシアで行われていた「エレウシスの秘」儀の一端を歌ったものです。

普遍神話的な要素が、個人の深層から湧きあがってくるという事実は、スイスの心理学者ユングが主張していたことでした。そうした事例が、この私の身にも、実際に降りかかってきたということです。ただし秘儀の冒瀆という形で。

それにしても、当時のわが惑乱ぶりといったら只事ではありません。それは、ここに収めた詩が無題であることから伺えますが、この時期にあって、私は、詩を書かなければ狂ってしまうような自分を認めていました。

詩作は、メッセージ的な行為であるよりは、強迫観念から逃れるための精神治療手段であったのです。詩は自分が生き残るために書いたものであり、題がないのは、当時、私が他者を顧みる余裕に欠けていた証拠です。

ニーチェの『悲劇の誕生』に、悲劇が生まれる過程が書かれてあります。私の詩作も、破滅に通じるディオニュソスの狂乱を、詩作（造形）というアポロ的行為によって昇華するものでした。ウェルテルは死んだが、ゲーテは生き残ったということの、稚拙な踏襲であります。

無題の二十の詩 I～V

I

自らの本性を見出したその時にも、

なお幻影の中に生きるか、生命を愛おしむ者たちよ。

ディオニュソスの暗がりが支配する狂乱の中で、

それでも生み出すのか、お前たちは！

虚無の一点に触れる前に、踊る二の足は緩慢となり、

その間からは新しい命が、見よ、いざ生まれきたる。

女よ、全てを見失うことで、全てを見んと欲することは無きか。
女よ、はたして、お前は寂寥を厭うのか。
ならば、魂を抱いた肉体よ、男が肉体を忘れさる、かの時に、
お前は涙を流して生むがいい。もはや詰りはせぬ、
生み、呑み込む者よ！

II

君の目に、僕が世にも愚かしいものとして映るならば、
それは、どれほど喜ばしいことだろうか。
それこそ、いま僕がもっとも強く望むものだ。

あらゆることから囚われるのを嫌がって、
むかしは、目をつぶって口づけすることも出来なかった。
そうした瞬間に、自分が彼女に仕える者となってしまいそうで。
そうした瞬間に、男としての優越をすべて失ってしまいそうで。
けれど今は、目をつぶったままに、人に仕えてみたいんだ。
体面を顧みる目をすべて失うまでに、
愚かしいまでに人を愛してみたいんだよ。

III

神よ、私が愛に生きられんことを。
しかし、ここに立ちほだかる運命はそびえて高く、
これを越えるには、人の愛はあまりに脆弱です。
どうか、私の愛を引き上げて、
あなたの傍にあるものとしてくれますように。
私の愛が、あなたの王座まで高まりますように。

IV

この瞬間に逃げ出すようならば、

僕は、あの時に死んでしまえばよかったのだ。

あんなにも好きだった彼女から逃げ出したときに。

彼女の悲しみを耳に焼き付けたとき、

そして、その悲しみに報いる手段なきことを知ったとき、

僕は、どんなにか死を望んでいたことか。

この瞬間に逃げ出すようならば、

僕は、あの時に彼女を凌辱してしまえばよかったのだ。

あんなにも無垢だった彼女を傷つけたときに。

彼女のこの表情を忘れることはない、と確信したとき、

そして、その表情のなかに、

自分の人生を縛るだけの呪力を見たとき、

僕はどんなにか、彼女の目を塞いでもおもうと思ったことか。

この瞬間に逃げ出すようならば、

僕は、あの時に涙を流した自分を否んでしまえばよかったのだ。

あんなにも苦しんだ彼女が子供を生んだときに。

彼女の母性の輝きに雷電のように胸打たれたとき、

そして、その輝きに自分の一生を捧げようと思ったとき、

僕は未来の労苦を思って、

どんなにか見たものを忘れようとしたことか。

V

狂気よ、われにくだれ！　　いますぐに。

賜られたお前が自分に向けられたとき、

それは人格を崩壊させる爆弾となるが、

賜られたお前が誰かに向けられたとき、

それは、人間の限界をこえた愛になる。

愛よ、私を満たせ、未来に何かを残せ。

無題の二十の詩 VI X

VI

願いが叶わぬとき、人は悔しい思いに昂ぶり、
祈りが聞き届けられぬとき、
人は悲しみの淵に沈む。
神に見捨てられたと感じたとき、
もはや悲しみから逃れる術はない。
ならば、光のもとに出んとするならば、どうすればいい？
なおも信じるしかない、自分を見放した神を。
そうして見放されたことが、
いつか顕れるであろう愛のための、
とこしえに深い配慮の糸なのだと信じるしか。
隠された神——マルティン・ルター、傾聴！

VII

そこにあるのは祈りの残骸、
叶わなかった祈りのむくろ。
しかし、むくろはやがて大地となり、
新たな若芽が、そこから萌える。
風に吹かれて鳴る葉音を聞いてよ。
祈りという若木が、
新生の名のもとに、
死者の無念を愛に昇華している。

VIII

なんという完成された物語！
だが、演じる主人公たちに、
涙を贈らずにはいられない。
何だ？　この雨は。
これは雨ではない。涙だ。
どうして涙が、この僕に注がれるのだ。
内外の世界は重なりあい、
真実は一つになった。
僕の流した涙が、
この身に降るのは、そのせいだ。

IX

この瞬間を逃げ出したならば、
僕はまた、自分の半身を失って、
こいつを見出すために、
彷徨の人生を送ることになるだろう。
そんな時間はない。僕には、
自分のすべきことが分かっているのだから。
あの時は、自分の目的を見出すための、
重要な前提として、彷徨を許された。
だが今は、彷徨に身を委ねたら罪になってしまう。
そうじゃないか。だって僕は、
誰よりも自分を知り、自分の、
この醜い自分のすべきことを知っているのだから。
僕は、彷徨うぐらいならばここで果てる。
嘲笑によってか、未来によってか。
それでもいい。僕の人生に意義はあった。

X

君の美しさを見誤っただって？

僕は、君を通して自分の心を見ているだけだ。

君の美しさを見いだすことは、すなわち、

この胸に、美しい世界を見出すことに他ならない。

けれど……たとえ君が醜かったとしても、

僕は、あまりにも長く、君を眺めてしまった。

君を嫌いになるなんて、絶対に出来やしない。

無題の二十の詩 X I ～ X V

X I

愛することが辛い。どうして、

こんな気持ちになってしまったのか。

人の本質が愛にあることを知り、

それが真実であることを確かめるために。

それは果たされた。だから祝福しておくれ。

ああ、祝福をこそ……

なのに僕の前に投げ出されたのは、

果てなき、いばらの長き道。

これが贈り物だというのか。

神よ、神よ、神よ、

いくら呼んでも甲斐なき神よ！

いと高きところにおわす神よ、

私に祝福を！ 祝福を！

X II

僕が、人に対して何かしてやれるなど、

ああ、なんと傲慢な幻想であったことか。

僕に愛があったならば、

どうして彼女を助けるだけの、それだけの力ある自分を、これまでの人生の中で築いておかなかったのか。僕は、虚偽をあらわした。彼女を助けると言ったから。僕は、偽善をあらわした。彼女を救うと言ったから。僕に力はない。僕は、ただ何かをしようとしただけだ。何をすることも出来ないくせに。

X III

共に苦しみばいいのだ。
なのに神よ、あなたは何と残酷な方なのでしょう。
女が最も悲しいとき、男は、
その悲しみを知らずにいることが出来るのです。
僕は、自分が男であることが恥ずかしい。
守るべき者が、守られるべき者の悲しみを、
クソッ！ 少しも知らずに済むだなんて！

X IV

君は、どんな顔をして、この僕を迎えてくれるのだろうか。
僕としてはね、どうか泣いてほしいんだ。心ゆくまで。
でないと君は、笑うべきときに、
どうしても笑えなくなってしまうだろうから。
泣くべきときに泣けない女は悲しいと言うけれど、
それ以上に、女という存在であることは、
なんと悲しいことなのだろう。
女は悲しいよ。男もともに無責任であったとしても、
その罪のすべては女にかかる。
ああ、その神秘の身体は、
無限の悲しみによって養われている。

X V

愛してる、
そうやって力が与えられるのならば、
僕は、この咽がちぎれるまでも、
愛の名前を叫んでいよう。
どんなに愛していても、その思いを、
口では伝えられなくなるまでも。
その時が来たなら、僕は、
画家の手で君を描くことができるから。

君を描くことによって、
この身に力が与えられるのならば、
腕がへし折れるまで、君の輪郭を追い求めよう。
どんなに愛していても、
その姿を描出することが出来なくなるまでも。
その時が来たなら、僕は、
包み込むような眼差しで君を見ているから。

君を見守ることによって、
この心に優しさが満たされるのなら、
何も見えなくなるまでも、
君の横顔を眺めて暮らしていよう。
どんなに愛していても、
君の一切を感じられなくなるまでも。
その時が来たならば、僕は、
天使となって君のことを守るから。

無題の二十の詩 X VI 〱 X X

X VI

六月、雷鳴がとどろき、

私の心に嵐を吹き込む。

荒れよ、この魂のすべてよ。

彼女に捧げる言葉が激しいものとなるように。

真実の激しさに満ちるように。

真実の激しさが、優しさと呼ばれるものに、

愛と呼ばれるものになるように。

激しさがなければ、愛とは何か。

愛は静穏にして、底に激流を擁する。

XVII

続いていけ、いばらの撒かれたこの道よ。

誰も歩こうとしなくとも、この私が歩く。

新たな道を生みださんがために。

足からは血が流れ、その流れた血が、

私を醜くもするだろう。

しかし、私の心は血によって清まり、

いつか彼女を包めるまでになる。

しかし、こうして歩む道は、

決して終わりのこない道。

この長い道にあって、どうか、

美しいものを求める気持ちを、

この幼稚な心が忘れませんように。

どうか、愛する気持ちを奪われませんように。

お願いいたします。

いばらを撒かれた優しき方、神よ。

XVIII

その髪に指を通したならば、

濡れた真珠よりも澄んだ光が僕を包むだろうに。

その首に手を廻したならば、
陽の中の花弁よりも白い清冽さが僕を包むだろうに。
その唇に唇を重ねたならば、
神に抱かれるよりも幸せな永遠が僕を包むだろうに。

X IX

お前が、そんなに美しいというのか。
自惚れるな、お前程度の容姿を持った者など、
この世にいくらだっているだろう。
だが、なのになぜ、
この胸は、お前によってのみ揺らぐ？
なぜ、お前のさして軽やかならざる声によって高鳴り、
その雅さのない笑い声によって悲哀に満ちる？
どんなに美しい女性を前にしたところで、
このような事態には、決して至るまいに。
なぜお前だけが！ お前だけが！
ならば、いくらでも己惚れるがいい、
この私の前でなら。ああ、お前には勝てない。

X X

君という風が吹くと、
僕という豎琴が鳴る。
アイオロスの豎琴が奏でる、
詩という名の音を。
けれど、豎琴も黙るだろう。
君という風は、
いま吹き抜けていき、
二度とは会えないから。

タレイアへの感謝

緒言・喜劇の女神へ

喜劇といえば、古来より道化役がつきものです。楽しい道化、陽気な道化。その屈託のないおどけぶりを見ることによって、私たちは日常の辛苦を忘れることが出来るのです。

道化「そんな、筋の通ったことなんて言えやしませんがな」

ヴァイオラ「君は陽気だね。気づまりを感じることなんてないんだろうな」

シェイクスピア『十二夜』より

「いいなあ、本当に馬鹿だなあ。苦しみも気づまりも感じやしないんだろうなあ」と、私たちは感じるわけです。

しかしながら、ルオー（前出した画家モローの弟子筋にあたる）が描いたピエロ（道化）は、まあ、なんと暗く悲惨な顔をしていることでしょう。

道化師の顔.png



模写 ルオー「道化師の顔」

明るく振る舞うことが義務となってしまった者の悲哀、かの『道化師の顔』には、そうしたものがハッキリと表現されています。

となれば、本当の悲劇は、もしかしたら喜劇の中にこそ、見出されるのかもしれませんが。その典型であり、また非常に興味ぶかい例が、ベートーヴェンの往生でしょう。あの苦悩に満ちた人生を終えようとしたとき、ベートーヴェンはこう言いました。

「友よ、拍手を。喜劇は終わった」

さて、この章にかかげた唯一の詩は、創作の時期において、前章と完全に被さっています。しかし、自分自身のために詠った前章の詩群に対して、こちらは人に対する贈り物として書きました。誰に対しての？ 愛するピエロに対しての。

アマデウス

君が、モーツアルトをプログラムした演奏会に訪れたならば、

楽器から、陽気に澄んだ音色が奏でられたところで、

なぜか聴衆が涙を流すのを見ることになるだろう。

おそらくは、とても不思議な気分だね。

でも、彼らはおかしくなってしまうたんじゃないんだ。

本当に、本当に悲しんでいるんだよ。

「軽きが沈み、重きが浮かびあがる」

この言葉は、よくモーツアルトの音楽に冠される。

彼を無上に愛する者であれば、

「笑顔の悲しみを知らなければ、

笑顔の奥にあるものを見出さねば、

お前は、決してモーツアルトを観賞したことにはならない」

そうとまで断言するはずだ。

モーツアルトの心材は寂しい。暗く悲しい。

彼は誰よりも寂しがりで、

いつも、細かく震えた息だけで、

その幼く小さな胸を満たしている。

けれど、彼は人の優しさに触れたくて、これを失いたくなくて、

誰の前でも微笑まずにはいられない。

笑顔を見せずにはいられない。

彼の唇は笑い、けれども、

その目には大粒の涙が浮かんでいる。

浮かんでいるんだ。悲しみの涙が、寂しさの涙が。

その涙は音楽のなかにも滲みわたり、

微笑みたる陽気な旋律と楽想のなかに、悲しみを目一杯に満たす。

僕らが、芸術に人の衷心を聞こうとするのなら、

その悲しみを感ずることが出来ないことは、すなわち、

彼の心を見放したのと同じになるだろう。

けれど……けれど、誰もがこの若い青年を愛する。

だからこそ、陽気な旋律に浴していながら涙が流れる。

悲しめばいいじゃないか。

悲しみを隠したら、

その、本心を隠さなければならぬという悲しさが、

かねてからあった悲哀の蒼ざめた色合いを一そう深めてしまう。

悲しいのに、どうして、そんなに明るく振るまうのか。

どうして、そんなにも屈託なく笑うのか、って、

そう憤って、僕らの目に涙は流れる——

君の笑顔を目にする時のようにね。

笑うな、愛するひとよ。

あなたの笑顔を見て、この胸には安堵が走ったのだ。

あなたの悲しみが、おそらくはまだ浅瀬にあるものと感じて。

この眼が、幾度となしに涙を流したことが、滑稽に感じられるほど、

君の、一度の翳りも知らぬような笑顔が、この胸に安堵を与えてくれた。

だから、自分の深刻さ加減の滑稽なことに、僕は笑いさえしたんだ。

けれど、その日の真夜中、

僕はそれまでにないほど激しく泣いた。

屈託のない笑顔の後ろに隠れた悲しさを、寂しさを、暗さを、

それらを感じることが出来なかった自分が情けなくて。

流れるモーツアルトが、なんと皮肉な笑みを浮かべていたことだろう。

愛するひとよ、もう笑うな。それは悲しいよ。

涙が出るよ、それは溢れるよ。

ポリュムニアへの感謝

緒言・讃歌の女神へ

ムウサを崇めることによって、ムウサに靈感を与えられることによって、この詩集は紡がれてきました。ムウサという女神、女性の姿をとった神性に導かれることによって。

その神性は、芸術家によってムウサと呼ばれ、哲学者によってソフィア（知）と呼ばれ、キリスト教者によってマリアと、神秘家によってアニマと、またゲーテによって「永遠に女性的なるもの」と呼ばれてきたものです。

彼女は自分に近づいてくる男の性向によって名前を変えはしますが、その本質は決して変わりません。精神的な女性に対する男の求心性が「文化」を作っていったという事実——それは、右のすべての女神と、男とのあいだに共通する営為なのですから。

そこには芸術が、哲学（知への求愛）が、作業（オプス）が、つまり文化がありました。

男の理性は文化をつくる力です。そして、その力は女性の中にある超理性、因果律を越えた永遠性に向かうことによって、肯定的な働きを成すのです。女神がいなければ、女性がいなければ、理性は、創造性から離れて、破壊の道具となり果てるしかありません。

ゆえに永遠よ、神の似姿よ、理性の不安を癒す「過去の創始」よ、それらを深奥に宿す女性よ、それらを眼前に現してくれる女神よ、讃えられよ。ほめうたに彩られよ。

あなたを讃えることによって、この身が、真に意味ある文化の一端に参じられるように。

pn8



静穏

静かな愛、静かな悲しみ、
激しさを越えて、この胸を苛む。
静穏さ、それは極致にあっては、
胸を捉えて放さぬものとなる。
晩年の芸術家たちを見よ。
それは静かであり、深い。

足下の赤い星々

真夜中に、焚き火の始末を確かめてみたら、
そこにあった灰は、まるで恋の墓のよう。
靴底で灰色の一枚皮を押し広げると、
くすんだ表皮の下から、無数の赤い光が、
まだ消えずにいた、紅色の炭が輝いて現れる。
あれほどにも愛した君に対する、
今の胸にある、僕の想いのように。

想いは死んではいなかった。
火は消えていなかった。
そして、灰の下で光る赤い炭は、
勇猛と燃えさかる炎に比して、
なんと、夢幻のように美しかったことか。
なんと、遠く高きところにある、
あの星空の瞬きに似ていたことか。
そこには宇宙があった。

恋慕にたぎる炎は世界を狭めてしまったが、
それが拡散し、けれど火が消えずにいた時、
そこには、大いなる宇宙の相が現れ出たのだ。
僕は、宇宙の広漠たる美しさを詩にして、
そこに君の名を記してもみよう。
星のすべては君なのだから。

摂理

愛した人がいなくなってしまった時には、
その人の面影を胸に抱いたまま、
もはや他の誰も愛さずにいることが美しいのだろうか。
また、愛すべき人に巡り合った時には、
あなたが、それまでに出会ってきた人、
それまでに愛した人は、残らず忘れねばならないのだろうか。
過去に誰かを愛していたことが、
いま目の前にある人への忠誠を崩すことになる、
そのように思えてしまうがゆえに。

ああ、どうして自らを縛ろうとするのか。
ある人は、過去の人を、それでも現在の人としたいがために、
目の前にある人間を否定しようとする。
ある人は、目の前の人間に忠実であることを誓うために、
必死に過去に出会った人を否定しようとする。
ああ、どうして自らを縛ろうとするのか。
私があなたならば、その時こう誇らしげに語るのに。

「私には、過去に愛した人がおりました。
そして、その愛が真実であったがゆえに、
多くのことを学び、この学びによって得た、
洞察の力によって、今あなたを見出したのです。
過去に、あの素敵な人に出会わず、

あの人を愛さなかったならば、私は、
成熟した洞察によって、
あなたの素晴らしさを、それを、
こうして見出すことは出来なかったでしょうし、
またあなたも、今の私を顧みることはなかったでしょう。
あの人に出会わずにいた、
昔の浅薄な私のままだったなら、きっと、
今あなたに愛されることはなかったでしょう」と。

おわりに

かなり長い小説を書いている途中、主人公の独白がちょっと長くなってしまったので、ワープロを操
作して行を改めていました。そして「ここは次の行だろう」「あっ、ここも行分けしないと変だ」とやっ
ているうちに、

「なんだか詩みたいになっちゃたぞ……ん、本当に詩みたいだ。じゃあ、ここは詩ということにして……
それでもって俺は詩人だな」

と決めつけてから、もうすぐ三年になります。

※『ムウサたちの頌歌』を上梓した当時のこと。右の文章を換言して要約すれば『アトラス』で「太陽と
月の詩」を書いたときから三年が経ちました、ということになる。

この三年のあいだに、ファイル一冊分の詩がたまりましたが、今回、その中から四分の一ほどを選ん
でみました。

詩は、書いている本人にとっては、かけがえのない創作分野となりました。ですが、そうして創作し
たものが、はたして受け取り側の益になるのか、今の時点では何とも言えません。願わくは、私の詩に
よって、胸に残す方がおられますことを。

最後に、これらの詩の誕生を導いてくれた女性たち、初恋の君、姉さんのようだった人、そして生涯
無二の愛すべき女性に心よりの感謝を捧げます。

ムウサたちの頌歌

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
